

# 子供の絵をどう見るか

## How to understand children's paintings

岩見健二\*

(平成 29 年 7 月 12 日受理)

### 要約

子供たちが感じたことや考えたことを自分なりに表現したメッセージを、指導者が深く読み取りその感動を的確に伝える事により子どもたちは次の表現へと意欲を持つ。この好循環が、子どもたちの感性と創造力を豊かにする人間形成の為の最重要要素である。

様々な子どもたちの造形活動の中でも彼らの絵を的確に読み解くことは最も難しく大変重要である。

その為には、保育者自身が豊かな感性と自信をもって自己を表現する意欲を備えておく必要がある。しかし、保育者養成課程の「造形A」の最初の私の授業に来る学生たちに尋ねると、造形表現に対して苦手意識を持つ学生が確実に増加しており私自身大変危機意識を感じている。

このことを踏まえ【1】子どもたちの絵をどう読み取るか。【2】豊かな感性と自己を表現する意欲を持つ保育者を養成する為の指導のあり方を考察する。

キーワード 造形 molding 絵画 A painting 感性 Sensibility

### はじめに

69 才の私や 20 才代の保育士に、4 才の子供の無垢な絵は描けない。そして私には 20 才代の保育士のような若い絵は描けない。しかし 4 才も 20 才代も私のような絵は描けない。それぞれがその年代特有の素晴らしい感性の輝きを発揮しながら生きている。絵を読み解く為にはこの意識が根底になければならない。

子供の絵の審査員を務めている関係で、展示会場に於いて作者である子どもと保護者の会話をよく耳にすることがある。

「うまいやん!」「上手に描けたなあ」

いわゆる芸術作品も同様であるが、特に子供の絵の場合このような価値観で評価するのは、大きな間違いである。

図工教師時代、「全校造形の会」という行事が年 2 回あった。その日は一日中全学年が絵を描くという行事である。普段は専科である私が中学年・高学年の図工を担当しているのであるが、研修という目的で全クラスの先生方に指導していただき、私は各クラスを巡

回した。

その際、「その形が違う!」「色をもっとよく見る!」と叱っている教師が毎年数名いた。なぜ叱るのかという私の質問に、その教師たちから不思議と決まって同じ答えが返って来た。「私、図工苦手ですもん!分かりませんねん。」

子どもの絵を「上手」「下手」の視点だけで判断し、形や色の正確さよりもっと大事なものすなわち感性の輝きを見抜けない教師に叱られた子どもは苦手意識を持ち、成長して教師になったら、また同じ過ちを繰り返す。悪循環である。この悪循環を断ち切る為に子供たちの絵から何を読み取るのかを考察するとともに、彼らの絵を的確に読み取れる保育者を養成する指導の在り方を考察する。

### 【1】子どもたちの絵をどう読み取るか

#### (1)造形について

造形という言葉は、絵画・彫刻・工芸などの従来

の分野を超えた表現が増加した為、分野横断的な作品も含めた斬新な創造物を総称した概念として、最近よく使用されるようになった。比較的平面的な作品（絵画・版画など）を平面造形、比較的立体的な作品（彫刻・工芸・建築など）を立体造形という場合もある。この造形を私なりに整理すると①生活の造形 ②心の造形に大別する事が出来る。

### ① 生活の造形

生物が生きる為に行う創造行為である。鳥や魚は巣を作り、蜘蛛は昆虫を食する為に蜘蛛の巣を作る。人間も勿論、服を作り家を作り生活に必要な物を作り続けている。これはほとんどの生物が行う重要な造形行為である。

### ② 心の造形

この造形は唯一人間にしか与えられていない。言い換えれば人間として必要不可欠な行為である。悲しければ悲しい絵を描き、楽しければ楽しい音楽を創る。苦しければ苦しさを文章に表わす。

## (2) 発散と伝達

「心の造形」には**発散**と**伝達**の2要素が含まれている。電話中に、手元のメモ用紙に訳の分からないものを描いている事がある。これはその時の本人の心を無意識に表しているのである。退屈な講義にうんざりした時、何か分からないものをノートに描いている。教授に「退屈や！うんざりや！」とは言えないので退屈を絵にして**発散**しているのである。ただしこの絵を他人に見せても理解してもらえない。なぜなら自己完結型のいわゆる落書きだからである。

この「退屈」を他人に理解してもらう為にあらゆる工夫をして伝えようとする、これが**伝達**である。

この**発散**と**伝達**の2要素が完全に融合し昇華された作品が最高の「心の造形」である。このように「心の造形」とは「表現」と同義語である。

### (3) 発散と伝達の具体例

私的な話であるが、私達夫婦は若い頃どちらも小学校の教師であった。7才の姉と5才の弟健志は、小学

校と幼稚園から帰ると我々両親が帰るまで留守番をする毎日であった。

冬のある日隣に住む健志の親友で一つ年上のまさる君がいつものように遊びに来た。その日は三ノ宮という繁華街のゲームセンターに遊びに行こうという誘いであった。大人の足では10分ほどの道のりであるが、健志にすれば大冒険であったであろう。

「子供同士で盛り場へ行くな」という親の言葉を思い出し途中で引き返そうとしたが、帰る道さえ分からなくなったので、ついて行った。

5時に家内が帰宅した時、姉だけしかいなかった。6時に私が帰宅しても帰って来ない。めぼしい友達の家に電話してもわからないので、いよいよ警察に頼ろうかと思った矢先、健志が帰ってきた。私と家内はありとあらゆる言葉で叱りつけた。

健志はしばらく玄関に立ちすくみ大声で泣き続けた後、食卓の前に座り、たまたま置いてあった新聞紙の広告の裏に、たまたま置いてあった鉛筆で2枚の絵を描いた。



絵1 発散と伝達の具体例A



絵2 発散と伝達の具体例B

言うまでもなく丸顔が健志で三角顔がまさる君である。このことから「心の造形」とは、**発散**と**伝達**である事を理解することが出来る。

#### (4) 題材と主題

題材と主題この2つの言葉を混同すると、保育者が子供に絵を描く場面を与えた時とんでもない間違いを犯すことがある。たとえば昨日みんなで見た「花火を描こう」というのは題材である。それに対して主題は一人一人の子どもが花火の何に感動し花火の何を描くかである。「大きくて立派な花火を色いっぱい画面いっぱいに描こう」というのは保育者自身の主題であり、その主題を子どもたちに押し付けるのはもっとも危険なことである。

ドンと咲いた花火よりシュルシュルという音を立ててのぼっていく咲く前の緊張感を描きたいという子どもにとっては、それがその子の主題である。空を見上げたらお父ちゃんの鼻の穴の向こうに花火が咲いていた。それを僕は描きたい。それがその子の主題である。主題は子供の数だけある。

#### <凧揚げ>



絵3 凧揚げA



絵4 凧揚げB

絵3と絵4の題材は、どちらも凧揚げである。しかしそれぞれの主題はまったく違う。

絵3の作品の主題は「高く上がった凧」である。それは、ビルや人間を小さく描き、凧を画面の思いきり上に描いている事から伺える。この作者へのコメントは「凧、高く上がったんやねえ！ 誰のが一番高く上がった？」と問いかけると、その時の状況を詳しく語ってくれるであろう。凧が高く上がった感動を保育者に伝達出来た喜びは自信になり次の表現への意欲につながるのである。

絵4の作品の主題は「友達と仲良く楽しく凧揚げをした」である。楽しそうな笑い顔を大きくたくさん描いている。誰かが笑ったことやしゃべったことなど楽しかった思い出が溢れている。この作者に対しては「楽しそうやなあ！これは誰？」と聞くと、次々と友達の名前を教えてくれるであろう。その時誰が何を言っただれが笑ったなど詳しく伝えてくれるはずである。

このように子どもの作品を見てその主題を瞬時に読み取り、それに基づいた的確な問いかけや感動を伝えることが、造形教育の基本である。

## <麒麟>

次に、麒麟が題材の4点の作品のそれぞれの主題を考察してみよう。



絵5 麒麟A

絵5の主題は「麒麟の首の長さ」である。

「ながーい首を描いていたら胴体も足も入らなくなってしまった。ほんまに長かってん」という言葉が聞こえてきそうである。左下の白で描かれた小さな人はおそらく作者自身であろう。乗ってみたいという願望が叫びに描かせたのではないだろうか。



絵6 麒麟B

次に3頭の麒麟と3つの家が描かれた絵(絵6)を見ることにする。

動物園の檻に父〇〇夫10歳・母〇〇子8歳・長男〇〇夫生後5か月などとよく看板が出ているが、それ

を知って子どもが「あれがお父ちゃん、あれがお母ちゃん、これが赤ちゃんで寝るおうちも3つある！」と話す姿がよく見られる。

この絵6の主題は「麒麟の家族関係」であろう。自分が知った喜びをみんなに知らせたいという心が素直に伝わってくる。



絵7 麒麟C

絵7には柵のようなものと水色や緑色の大きさの違う丸が描かれている。一つ一つに全部意味があるのだろう。それたちが何なのか全部解説してくれるだろう。そして麒麟の背中に何人もの友達に乗っているようだ。事実と願望が同居するのも子供の絵の自由さである。そして何よりもこの絵のすばらしさは、線の勢いと筆圧の強さである。自分の目で見たものを全部伝達しようという自信と意欲に溢れた作品である。保育者はそこに感動し本人に伝える事を忘れてはならない。



絵8 麒麟D

絵8の作者は友達と一緒に元気に運動場で遊ぶような子供ではなく、保育室の隅で自分一人の世界に入り込んで人形とおしゃべりしたり、おしゃれが好きな女の子であろう。

数年前、某市の幼稚園の先生対象の講演会でこの絵を見てどう言ってあげるか聞いたところ、一人の先生が「赤ちゃんのキリン？」と答えた。これは絶対に発してはならない言葉である。

この作者は、先生がせっかく長い紙をくれたし友達は大きく描いているのに小さく描いてしまったことを心の隅で悔やんでいるかも知れない。それなのに上記の言葉はこの子にとって皮肉であり酷な言葉である。「おしゃれなキリンが描けたね！」この言葉が大切である。もし保育者がこの作者にもう少し深刺となるのを願うなら、「いろんなおしゃれなキリンさんをたくさん描いてくれる？」と言えば喜んで描いてくれるであろう。

## (5) 留意点と今後の問題点

小学校の図工教師時代「うちの子は紫色をよく使うのですが心配ないでしょうか？」というような色彩や形についての保護者からの質問が何回かあった。絵から作者の状態を読み取り、健全な発達・成長を促す色彩心理学等重要な学問があるのは充分承知している。

しかしその視点のみで子どもの絵を理解するのは、間違いが生じる危険性を孕んでいる。例えば紫色を多用する子供が全員何か異常を抱えているとは言えない。これは統計の問題である。鯛は魚であるが、魚は全部鯛ではない。担任がある子どもの絵を見て「やっぱりこの子はこんな絵を描くのか。この子の家庭がああだからなあ！」と呟いた。こんな読み取り方は絶対にしてはならない。絵から余分なものを読み取るのは人権侵害である。画面に向かった時の純粋な子どもの「心」のみを感じとるのが、造形教育である。

今日インターネット・スマートフォン……等、伝達機器・方法がより多様化し、絵画を取り巻く状況がますます複雑化しているように思う。

注文したラーメンをスマートフォンで撮ってツイッターで友達に知らせたり、日記のようなものをブログで流すという行為がごく一般的になった今日、「表現」と「情報伝達」の境界線が曖昧になりつつあるのではないだろうか。我々はその決定的な違いをはっきりと区別しておかなくてはならない。

先日、一般教養の『芸術』の授業で「自分の心を造形しよう」という実技体験をさせた。机間巡視すると、多くの学生がケーキ・かつ丼・ベッドなどを描いていた。おなか減った！眠たい！のだそうだ。

「表現」とは前述のように心を造形し他人に伝達するということであり、人間にしか出来ない素晴らしい行為だ。しかし、それは個人的な欲求や嗜好を伝達する事ではない。

## 【2】豊かな感性と自己を表現する意欲を持つ 保育者を養成する為の指導のあり方

学生たちは「造形A」で、クロッキー、デッサン、水彩画、色面構成等、造形の基礎を体験して造形への自信を持ち、「造形B」では、保育現場に比較的直結した作品として影絵、飛び出す絵本、先生と子どもたちのコラボレーション壁画を制作し、保育者としての自覚と責任を養うことを目的としている。

### (心を開くクロッキー)

「造形A」の最初の実技の授業で、学生たちのほとんどがある種の不安を抱いて造形室に入ってくるのがひしひしと伝わってくる。事実、絵を描くことが好きか苦手か端的に聞くと、およそ80%の学生が苦手の方に挙手をする。

その原因の一つが、小・中・高校に於いて「総合学習」という科目が新設された影響もあり「図工」「美術」の授業時間が削減され、『個の表現の場』が急激に減少したことである。第2に、「造形あそび」という集団教育的な学習が、明確な教育目的をなおざりにしたまま教育現場で今なお続いており、個を主張しな

くても集団の中に埋没していれば事足れるという精神的風潮が増大している事であると考えられる。

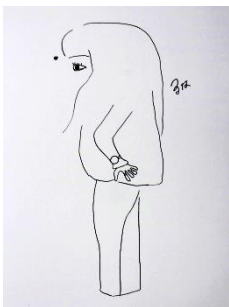
「造形A」では最初にクロッキーを体験させる。なぜならクロッキーとは、瞬時に対象の本質・美・動き・ボリュームを捉えるという感性を養う重要な要素を持った造形の基本だからであり、学生たちの感性を目覚めさせ、不安をまず払しょくし、造形に対して心を開き自信を持たせる重要な題材として最適だからである。

授業ではまず、造形室の中心にハンカチ落としのように円陣になって椅子に座り、中央にポーズをとった学生の全身の動きを短時間でサインペンの線だけで描くということを説明する。

具体的には1ポーズ3分であること、モデルは交代し、計5枚の絵を描くことが課題である。ポーズの間に伝える留意点をよく理解するように伝え、1枚目をスタートする。

《ここでは一人の学生の作品を順を追って図示し、説明する。》

### 〔1ポーズ目〕

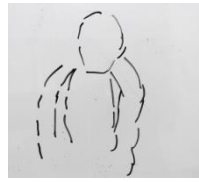


絵9 学生作品A

頭部や身体などを別々に描かず線は続けることを、板書し説明する。

線からだけで作者の今の気持ちかが伝わることを説明する。参考事例1は自信がない線、参考事例2は心が硬い線である。

心が柔らかく自信がついてくると線も柔らかくなる傾向がある。



絵10 参考事例1



絵11 参考事例2

### 〔2ポーズ目〕



絵12 学生作品B

スケッチブックを見ないでモデルを見ながら描く。なぜなら、モデルからスケッチブックに目を移す瞬間真実の線を一瞬のうちに忘れて間違った線を描いてしまうから。但し線の描き始めはスケッチブックを見ても良い。

この2つの約束を伝え、参考例を描いて見せる。



絵13 参考事例3

身体の各部分の大きさや長さの比較についても説明し、その事にも留意して描くように伝える。(なお、障害のある学生がいる場合は十分な配慮をするようにしている)

### 〔3ポーズ目〕



絵14 学生作品C

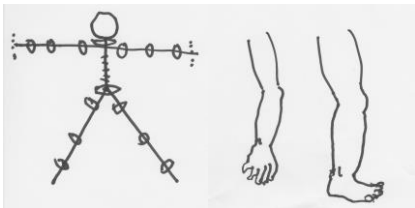
また、描き始めの部分を考えるように指示している。例えば掃除をしているポーズの場合、モデルは箒を持つ手に神経を集中している。そこから描けば、より一層モデルの動きをダイナミックに表すことが出来る。(※学生作品Dの場合、手が見えなかったので結局頭部から描いたようである。)

### 〔4ポーズ目〕



絵15 学生作品D

関節、筋肉について板書で説明する。  
(なお、障害のある学生がいる場合は十分な配慮をしている。)



絵16 参考事例3

絵17 参考事例4

### 〔5ポーズ目〕



絵18 学生作品E

全学生のクロッキーを1枚目から5枚目まで本人と共に見て、全員確実に生き生きとした絵になったことを確認する。今後は1枚目の絵に戻ることはないので自信をもってこれからの「造形」を楽しんでいこうと伝える。

「私にも描けた!」という達成感で学生たちの表情が見違えるように豊かになったことを感じ私自身毎回大変充実した気持ちになる。

ただし、この授業は、あくまで学生の苦手意識を払しょくし、彼らにもともと備わっていた素晴らしい感性を呼び覚ますことが目的であり、技術論ではないということを私自身常に留意しておく必要があると感じている。

### おわりに

学生たちは1年間の「造形A」「造形B」を通して創造する事に積極的、意欲的になり見違えるほど成長していくのが如実にかがえる。そして授業中に聞こえてくる友達の作品へのさりげないコメントも優しき確になっている。

毎年巣立っていく学生達が、豊かな感性で子どもたちと表現の喜びを共有し彼らのメッセージを的確に読み取る素晴らしい造形教育をしていることを信じ、又その事を願っている。

- ・絵1～絵6は、5才児の作品  
学生作品A～学生作品Eは、保育科1年生の作品
- ・素晴らしい作品を描いてくれた子供たちと、学生作品の掲載を承諾してくれた学生に感謝します。
- ・また、子供たちの作品をご指導・ご提供下さった唐木良和氏(主体美術協会)に心からの敬意と感謝を申し上げます。